

P-088

医療的ケア児を支える訪問看護師と相談支援専門員をつなぐ連携教育プログラムの開発(訪問看護師への介入調査結果から)

草野 淳子¹⁾、井原 健二²⁾

¹⁾大分県立看護科学大学 看護学部、

²⁾大分大学 医学部 小児科学講座

【研究目的】在宅で生活する医療的ケア児とその家族を支えるためには、訪問看護師とサービスの調整を行う相談支援専門員との連携が不可欠である。本研究の目的は、訪問看護師と専門支援相談員の連携を強化する、教育プログラムを開発し評価を行うことである。看護師への調査から両者の連携を強化するための教育プログラムの効果を検証する。【研究方法】研究対象者はA県内の指定訪問看護事業所のうち医療的ケア児の訪問の経験がある訪問看護師各1～3名、障害者支援事業所約180か所から相談支援専門員各1～3名の選定を依頼した。連携プログラムは2日間であった。
 <1日目>2024年7月20日：事前質問紙調査、地域ごとのグループ分け、名刺交換、社会的状況（研究者）、訪問看護師・相談支援専門員の実践活動、障害児の発育・発達（理学療法士）、事例検討、<2日目>2024年8月10日：訪問看護師・相談支援専門員の活動事例、グループワーク、交流タイム、事後質問紙調査。調査は属性と在宅医療介護従事者顔の見える関係評価尺度21項目（福井2014）、連携行動評価尺度17項目（福井2015）、日本語版組織学習サブプロセス測定尺度23項目（石井2020）を使用し、介入前と後、介入終了1カ月後に調査し、対応あるt検定にて分析した（有意水準p<0.05）。本研究はA大学の倫理委員会の承認を得た。【結果】1日目の訪問看護師の参加者は13名、相談支援専門員の参加者は8名であった。訪問看護師の平均年齢46.5±10.1歳、訪問看護経験年数は平均7.1±5.7年、小児看護経験ありは84.6%であった。1～3回目まで、継続して参加しデータの比較ができた対象者は1回目12名、2回目12名、1カ月後7名であった。1回目と2回目の比較では、「在宅医療介護従事者顔の見える関係（p=0.168）」、「連携行動（p=0.03）」、「組織学習（p=0.003）」であった。2回目と3回目の比較では有意差はみられなかった。【考察】「在宅医療介護従事者顔の見える関係」では、プログラム前後の変化はみられなかった。「連携行動」では前後の有意差がみられているように、関係機関に気後れせずに何でも聞ける関係を築いていたと考える。グループワークは効果があったと考える。「組織学習」では、自施設において情報共有、問題解決や勉強会を今後も積極的に行う必要性を感じていた。

P-089

医療的ケア児を支える訪問看護師と相談支援専門員をつなぐ連携教育プログラムの開発(相談支援専門員への介入調査結果から)

草野 淳子¹⁾、井原 健二²⁾

¹⁾大分県立看護科学大学 看護学部、

²⁾大分大学 医学部 小児科学講座

【研究目的】在宅で生活する医療的ケア児と家族を支えるためには、訪問看護師とサービスの調整を行う相談支援専門員との連携が不可欠である。本研究の目的は、専門支援相談員と訪問看護師の連携を強化する、教育プログラムを開発し評価を行うことである。相談支援専門員の調査結果から、両者の連携を強化するための教育プログラムの効果を検証する。【研究方法】研究対象者は、A県内の障害者支援事業所約180か所から相談支援専門員各1～3名、A県内の指定訪問看護事業所の医療的ケア児の訪問の経験がある訪問看護師各1～3名の選定を依頼した。連携プログラムは2日間であった。
 <1日目>2024年7月20日：事前質問紙調査、地域ごとのグループ分け、名刺交換、社会的状況（研究者）、訪問看護師・相談支援専門員の実践活動、障害児の発育・発達（理学療法士）、事例検討、<2日目>2024年8月10日：訪問看護師・相談支援専門員の活動事例、グループワーク、交流タイム、事後質問紙調査。調査は属性と在宅医療介護従事者顔の見える関係評価尺度21項目（福井2014）、連携行動評価尺度17項目（福井2015）、日本語版組織学習サブプロセス測定尺度23項目（石井2020）を使用し、介入前と後、介入終了1カ月後に調査し、対応あるt検定にて分析した（有意水準p<0.05）。本研究はA大学の倫理委員会の承認を得た。【結果】1日目の相談支援専門員の参加者は8名、訪問看護師の参加者は13名であった。相談支援専門員の平均年齢41.0±11.4歳、相談支援専門員の経験年数は平均4.7±4.3年、小児の相談支援経験ありは71.4%であった。1～3回目まで、継続して参加しデータの比較ができる対象者は1回目5名、2回目5名、1カ月後3名であった。1回目と2回目の比較では、「在宅医療介護従事者顔の見える関係（n.s.）」、「連携行動（n.s.）」、「組織学習（n.s.）」であった。2回目と3回目の比較でも有意差はみられなかった。【考察】1～3回目の調査結果の分析に有意差はみられなかった。参加者の発言では、「地域の訪問看護師と顔見知りになった良い機会であった。」「不在が多く連絡が取りづらい訪問看護師にも、気軽に相談できそう。」であった。地域の関係職種と知り合う機会となり、グループワークは効果があったと考える。